社宅料などハネ返そう

労協、福利厚生要求を出す

三池労組はこのほど会社に、怒りをこめて、労働協約、福利・厚生に関する諸条件の改善向上をめざし要求を出した。

労働協約、福利・厚生に関する諸条件の向上と改善をめざす要求は、執行部が十三日にすでに会社に出し、早くも十九日からは中央ほかで交渉にはいる予定だ。

この闘いについて忘れられないのは、去年この種の要求を出したのに対し、何と会社が社宅料を徴集（厳密には社宅管理費で、これまで取り立てたことはない）するなど逆提案をもち出してきし、しかもそれを、どんな反対の声にも耳を貸すことをせず押しつけたことである。したがって、組合員の間からは、「社宅料をハネ返すために、強い闘いを組むべきだ」という声さえあがっている。会社は、十分労働者のこのような怒りの声を聞くべきだ。

とまれ要求内容については本紙号外（二月十三日発行）でくわしく伝えたので省略するが、まわりの新労組員、仲間とも手を取り合い、話し合いながら、職場ごと、地域ごと団結を固めていくことが先決だろう。

×

なお、労働条約、福利厚生闘争への決意を示す次の一文がある。

「昨年は、会社が一方的に赤字不況宣伝を行ない、逆提案を強行するというきびしい闘いで終っている。

これに対し、組合員の怒りは極限に達した。残念ながら、結果として、営繕費の大幅削減、社宅料の徴収など大幅な後退となった。私たちは、今年は内部に書記労組との紛争・機構改革推進に当たっての一部内部の敵対行為などの混乱があったが、それを克服、そして組合本来の目的である職場の労働条件や地域の要求をくみ上げた。今こそ資本に対する怒りを結集して、要求貫徹めざし取り組もう」

なお、右の一文は三川指導部職場九分会新聞〝ほせん〟（第一号・一月発行）から紹介したが、同職場分会の発展も祈っておこう。

故・後藤さん遺族から礼状

本紙の一月一日号に、最後の最後まで三池労組に熱い思いを寄せながら、ガンのために一命を落としていった元三池労組員――後藤留治さん（行年六十四歳。元四山鉱採炭）の壮烈な死の様子が掲載されると、三池労組の内外に思いがけない感動を呼び起こすこととなり、本紙の同号は購読希望が続き、幾らあっても足りない状態だった。（**同号の記事参照のこと**）それほど、故人の他界が惜しまれたのであろう。

遺族に、故人の妻の貴和子さんがあることは前回の記事のなかでお伝えしたが、このほど貴和子さんから、故人の死を伝えた本紙にお礼の便りが寄せられてきた。お礼状は割愛するが、改めて故・後藤留治さんの冥福を心からお祈りする。

退職の人びと

先月、次の仲間が定年そのほかのために退職されました。これまでのご奮闘に敬意を表するとともに、今後のご活躍をお祈りいたします。がんばってください。

四山指導部関係

宮西　エさん　去年（以下同）十二月二日退職。荒尾市緑ケ丘鶯町二十七棟。

蒲池　哲夫さん　十二月七日退職。荒尾市大平社宅。

森　幸市さん　十二月十九日退職。荒尾市蔬屋中衣一九〇九―一四。

差しのべよう連帯の手

反合理化で闘う佐伯造船

二月六日の昼の休みに、折から大牟田をたずねてきていた全造船労組佐伯造船分会の二人のオルグを迎え、三川指導部で交流を行なった。

同分会は、大分県内屈指の地場企業の臼杵鉄工所（矢野鎮雄社長、従業員千三百十一人だった）の佐伯造船工場（大分県佐伯市鶴谷区無番地。主力工場）を基盤に組織され、総評―全造船につながる労働組合。長く、首切り合理化反対で苦しい闘いを続けてきている。

佐伯造船は、初めから主力株主だった石川島播磨重工業により今その経営権を完全に乗っとられてしまった。それだけに資本の攻撃がすさまじい。七八年頃七百六十人もいた佐伯分会の組合員数が、今はわずか百五十人。

優れた技術をもつ工場なのに、石川島播磨からすべての仕事はひきあげられてしまった。兵糧攻めだ。それでも負けず組合の力で、かってはト請工場だった町工場から逆に仕事をもらうなどしながら経営を続けている。

それでも石川島播磨は許さず、倒産宣言するなどして、最後には全執行委員に青年部活動家などを首切った。明らかに、総評―全造船につながる組合をつぶし、同盟―造船重機につながる臼杵の方に組合運動の主導権をにぎらせ、あまい汁を吸わんがためと見られている。暖い、連帯の手の伸びてくるのを待っている。

三川指導部に、全造船佐伯造船分会オルグ2人を迎えての交流。まるで、三池闘争を思わせる報告だつた。がんばれ佐伯。

なかま

本所指導部　平川　務　さん

▼…戦後まもなく入社。以来三十四年間水道課に勤めてきた人。ほとんどは、公休日なしの職場の濾過池運転で働かされてきました。

三池闘争後は会社の激しい差別と組織攻撃、合理化攻撃と闘い、今年三月にはいよいよ定年です。

三交替勤務者の少い本所のなかでめずらしく三交替で、それでも昼間の勤務のときなど、職場や地域の活動を心よくひき受けてもらっています。

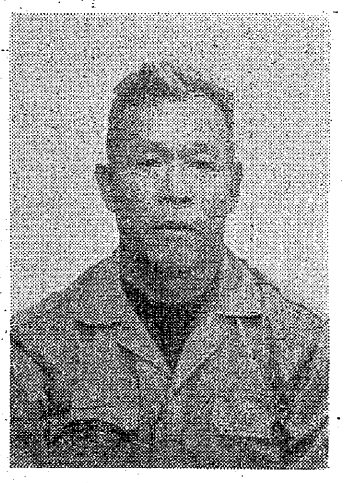
一方では、その人柄を示すように趣味が広く、金魚や鯉、ちゃぼやキジなどの小鳥の飼育から、さては盆栽や植木などの栽培に至るまで、愛好される動植物が多く、時を惜しむように飛び回っておられます。そんな人柄を、人はよく「こくんぞさんのごたる」と評しています。

なかでも、趣味で始められた庭木の手入れは、昨年の十一月にはなんと、「造園技能士」の国家免許一級を取得されるまでにいたりました。

▼…家族は、妻の富江さんに、も早やりっぱに成人した息子さんが二人。荒尾の新居に四人暮らし。

×

この項・本所＝西山正勝記



勤続34年で54歳。妻の富江さんに、2人の子どもと荒尾市川登字石神で4人暮らし。

組合の機構改革めぐる紛争について

三池労組は組合機構改革をめぐり、三池書記労組との間に生じている紛争について、先に次の声明を発表しました。全国の仲間の皆さんのご理解を得るため、その全文を紹介します。

三池労組は、昭和三十五年の三池闘争をはじめ、昭和三十八年十一月九日三池三川鉱で起きた炭じん大爆発以来、「命を守る反合理化闘争」を柱として位置づけ、CO闘争を取り組み、その闘いの一環として大災害裁判をすすめてきました。そのため全国の働く仲間の皆さんに、物心両面にわたるご支援をいただいてきたことを心から感謝申し上げます。

三池労組は、昭和三十五年に三井資本が行った組合活動家千二百名の首切りに反対する闘いで、資本から組織分裂の攻撃を受け、そのため当時一万六千名だった組織が、三池闘争から十九年を経過した今日では、六百五十名という組織となっています。

当然のことながら、組織人員の減少に伴い組合財政は極めて窮迫し、組合の財政確立のための組合機構の縮小は避けることができず、そこで専門委員会を設けて検討しました。十一日間の民主的討議を踏まえた委員会の答申にもとずき、組合機関で討議し、そして闘いに関する業務を執行してまいりました。

三池労組と書記労組との間では、過去におきましても、機構縮小に伴う執行部・書記の減員について、曲折こそございましたものの、そのつど話し合って了解してもらい、協力を得て今日にいたっております。今回も昨年の五月段階では、三池労組は書記労組との間に、①昭和五十四年十月一日からアルバイトに切り替える、②昭和五十五年度の抜本的機構改革については協力する、などの項で一定の合意を見るにいたりました。ところが協定文の内容について意見の対立が起こり、この結果不調に終ったのでした。

その後三池労組は、書記労組との間での円満解決をめざし、最大限の努力を積み重ね、誠意をもって交渉を続けてまいりました。その間の推移は次の通りです。

㈠　三名の直轄書記の、現時点での退職金は千五百万円にのぼりますし、このまま推移するものとすれば、今後は年間約百七十万円という積み立てが必要となります。しかし、その財源を確保することはとうてい不可能です。

㈡　従って直轄書記制を、やむを得ずアルバイト制に切り替えていくことを申し入れました。

㈢　労働条件については、現行の本人給を横すべりとし（期末手当、各種保険は現行通り）譲るべきところは譲る考えのあることを明らかにいたしましたが、その点どうしても書記労組の理解を得ることができず、「ことを裁判で争う」旨の通告（昨年十二月十七日、福岡地方裁判所大牟田支部）を受け、ついに交渉は決裂、今回の非常手段に訴えられるにいたりました。誠に遺憾に耐えません。

以上が推移ですが、それにしましても三池労組・三池主婦会の歴史的な闘いの総括ともいえる、あの組合旗掲揚台での書記労組の座りこみ行動は、この記念塔が、私達のみならず三池労組の諸先輩や全国の仲間の、血のにじむ苦闘に支えられた運帯の一つの結晶体であるだけに、誠に残念なことでした。現地の大牟田や荒尾はもちろんのこと、全国津々浦々で働き、闘い続けている諸先輩から、「俺の頭の上に座られている思いだ」との怒りの声が集中してまいりましたのは当然なことでした。

もちろん三池労組は今後も、あくまで民主的な討議を踏まえながら、決められた、機関決定をくつがえそうとする屈辱的な行動や、一部組織内外の機関無視、組合切り崩しには、断固たる態度を堅持し、全国の働く仲間とともに築きあげた三池労組の栄光ある歴史と伝統、名誉を守り抜き、三池労組を物心両面にわたってご支援いただいている仲間のご期待にこたえるべく、がんばる決意です。変らぬご支援、ご協力を心からお願いいたします。

一九八〇年一月二十九日

三池炭鉱労働組合

※　※